

長崎の原爆表象 —21世紀英語圏文学における〈土地の力〉*

Representations of the Atomic Bomb of Nagasaki:
“The Power of Land” in English Literature of 21st Century

平 林 美都子
HIRABAYASHI Mitoko

キーワード：長崎、原爆、21世紀英語圏文学、〈土地の力〉

I 〈土地の記憶〉の力

過去数年にわたり、私は長崎という「土地」に焦点を当てて研究をしてきた。2018年2月の初の長崎旅行では「隠れキリシタン」を、2021年10月の2度目の旅では「原爆表象」をテーマに関連史跡を辿った。そもそも「土地」のヘリテッジ文化への関心は、2010年から始まったイギリスへのフィールド・ワークにおいて、各土地の持つ歴史的足跡を「旅」というキーワードで辿ったことから芽生えてきた¹。「土地」への関心を抱いたもう一つのきっかけは、カズオ・イシグロ研究の中で出会った「記憶」の問題、とくに『忘れられた巨人』(*The Buried Giant*, 2015)における「集合的記憶」と「忘却」の問題である²。これらの関心事が「土地の記憶」、それも重層的な記憶を持つ長崎へと集約していったのである。

長崎の土地が持つ様々な文化的記憶の層から、外国文学を含めた作品が生まれてきている。近年、私は英米文学作品を一つずつ取り上げて論文にしてきたが、こうした論文を改めて眺めてみると、長崎という土地に文学創造を引き出す力があるように思われる。さらに付け加えるならば、作家が惹きつけられた土地の力に読者である私自身も惹きつけられたのである。

ある特定の土地が文学創造の契機になることについては、すでに多くの識者が表現を変えながら論じている。例えば、大江健三郎は自らの創作について故郷の四国の森を念頭に置き、「眼の前にしていた風景[を]基盤に創り上げた小説の場所^{トボス}」を「文章に再構築しようとした」と語っている(大江328-329)。林正子は大江の「眼の前にした風景」を「基盤」にした小説の場所^{トボス}を「〈故郷〉という〈風土〉」の概念に結び付け、「自然環境としての〈風土〉が[中略]人間の感性を方向づけ、文化を創造していく原動力」になるとして、文学における「場所の力」論を展開している(林17)。林はさらに大江の創作上の「場所の力」に「記憶」の要素も認めている。ある場所が作家の想像力を喚起し作品が描かれる場合、その作品内の出来事・事件の「場所」と「時間」が登場人物と読者に刻印され、その場所に力が付与される。しかもその「記憶」は個々人の感性に訴える「社会的記憶」となり、「文学作品の存在意義が発揮される」の

だと語る（林 19）。またエジプト学に記憶史を導入したヤン・アスマンは、「共同体の記憶は一つの世代だけに限定されるのではなく『伝達の記憶』『文化的記憶』として引き継がれる」と言う（Assmann 128）。こうした社会的記憶、文化的記憶は本稿で論じる「土地の記憶」と通底していこう。

社会学者の鈴木智之は「土地の記憶」について「場所（空間）と文学（物語）」の間の「媒介項」としてとらえている。鈴木の説明は次のとおりである。

物語とは、それ自体において、人間の時間的な経験を形象化する一つの様式であり、したがって特定の場所の舞台に物語が語られると、その空間に時間軸上のつながりをもった行為（筋）が呼び込まれることになる。この時、テキストはしばしば、土地に宿る記憶を呼び起こそうとする。そこに“かつてあったこと”を想起し、これを語りの中に呼び込むことで、その時点で生起する出来事（現在時における物語）は、一個人が体験しうる時空の広がりを超えて、より大きな集合的記憶の流れの中に挿入される。これによって、（ある一時点の知覚対象としてしか現れることのない）物質的環境が歴史を帯びた場となる。物語が土地の記憶の憑代よりしろとなることによって、空間は、それ自体の内に重層的な時間性をはらんだ生成の場へと変貌していくのである。（鈴木 25）

つまり、物語ることで土地は歴史を帯び、「力」を付与されることになるのであり、逆に言えば、無機質な土地が歴史を帯びるためには物語る必要があるのである。ただし、鈴木が「土地に貯えられた記憶」（鈴木 26）と言うとき、物語られる以前に土地はすでにそれ自体の記憶を持っているのである。彼はそれを「誰かが“霊媒者”として語らなければ」ならないと言い、土地（鈴木は都市を想定している）からの人間の働きかけに注目するのである（鈴木 26）。

この都市を行き交う人々は、現在時において見える表層の現実だけを生きているのではなく、無自覚の内に「さまざまな時間を同時に生きている」。その時間の重層的な厚みは、都市の「無意識」とでもいうべきものとして残存し、私たちの意識に侵入する機会をうかがっている。（鈴木 33）

ここでの「都市」を単に「土地」と言い換えても意味は通じるだろう。では「故郷」あるいは「地域」という言葉に含まれるような土地と密接なつながりを持たない場合はどうなのだろう。長崎在住の作家、青来有せいらい一（1958～）は文芸評論家の陣野俊史としふみとの対談において、原爆とキリシタン迫害の地、長崎を念頭に次のように語っている。

多くの人間が死んだ土地でも、ある時間が過ぎてしまえば、人間の日常の営みが戻っ

てきます。多くの人は何が起きたかは、ほとんど忘れたまま、日々の暮らしを続けていくだけでしょう。土地の歴史としては記録には残りはしても、住んで暮らしている人々は変わり、人々は被爆の経験もなく、意識も変わり、そこで何が起きたかなどは特に考えもしないで暮らしている人々がほとんどではないでしょうか。それでも土地とは無縁だった人々の奥底に、その土地の記憶がぼつとよみがえってくる瞬間があるのではないかと思います。「ポスト原爆文学」的なものがあるとすれば、そういう瞬間をとらえて書く以外にないかもしれません。（陣野 283-284）

本稿の最後に取り上げる青来の『爆心』はまさに記憶が「ぼつとよみがえってくる瞬間」を扱った作品である。これは鈴木「都市の無意識の侵入」に通じる「土地の記憶」のとらえ方だといえるだろう。

一方、歴史哲学者の野家啓一^のは自身の歴史観を「土地の記憶」という比喩で説明していく。彼は歴史が人間の事象を伴うものとして記憶されるためには物語る行為が必要だと言う（野家 10）。彼の場合「土地」はあくまで歴史／時間を空間化したものであり、地層という表象を用いて「時は流れない。それは積み重なる」と説明するのである（野家 182）。

[水平に流れ去る時間]に對置されるべきは「垂直に積み重なる時間」という表象にはかならない。つまり、歴史を記述する我々自身が内統する「現在」という横断面に、雪のように絶え間なく降り積もり続ける時間である。あるいは、歴史の地層として幾重にも積み重なって沈殿した一種の地質学的時間と言ってもよい。それは流れ去ることなく、現在の地表の各所に露出しているのである。（野家 183）

野家はさらにドイツの哲学者ライプニッツの『モノロジー』の中から「魂は自分の髪を一挙にすっかり展開することはできない」という「魂の髪」のイメージを借用し、「歴史叙述とは、無限にわたる『魂の髪』の中に探り針を入れ、そこに積み重ねられた過去の時間の『厚み』を測定するとともに、そこに貯えられた豊饒な物語を語り伝えることにかならない」と論じる（野家 187）。鈴木も野家も「土地」と「歴史」という研究対象の違いはあるものの、いずれもそこに「貯えられた記憶」を物語ることに着目している点は興味深い。集合的記憶の提唱者であるモーリス・アルヴァックスが「もし過去が実際にわれわれを取り囲む物的環境によって保持されていなければ、過去を取り戻せるということは理解されないであろう。われわれが注意を向けなければならないのは、空間へ、われわれの空間へなのである」（アルヴァックス 182）と語っているように、歴史という集合的記憶が空間＝土地に保持されるという考えは、もはや比喩レベルではないのである。

本稿では長崎に焦点を当てて、〈土地の記憶〉がいかに21世紀の英語圏文学における文学創造の契機になっているのかを考察していく。どの土地にも記憶の風景という歴史はあるが、

長崎ほどグローバルな視点から解釈されるべき「重層する記憶の風景」を持つ土地は多くないだろう³。キリスト教伝来、その後の迫害の歴史、海外への開港、近代産業化、遊女文化という世界史的な事象や文化が積み重なった長崎は、19世紀末から「土地と無縁」な海外の文学者の想像力を喚起してきた⁴。長崎のグローバルな歴史に原爆投下による大惨事が加わることで、原子力や核兵器使用への懸念は現実問題として増大してきている。本稿ではとくに長崎原爆に焦点を当て、〈土地の記憶〉が21世紀の英語圏文学者の意識に侵入し、どのような文学作品創造の契機となっていたのかを考察していきたい。

II ナショナリズムよりも個人の生を

ジャン＝フランソワ・リオタールの「大きな歴史」と「小さな物語」のポストモダン論を取りあげるまでもなく、歴史的記述においては個々人の体験は抹消されてしまう。個人の人生という「小さな物語」に光を当てるのが文学だとすれば、以下取り上げる作品では、埋もれてしまいがちな個人の人生が確かに救い上げられている。

〈ビッグ・ピクチャーに犠牲にされる個人—『焦げついた影』〉⁵

パキスタン女性作家のカミラ・シャムシー (Kamila Shamsie, 1973～) が長崎原爆に関心を持ったのは1990年代前半、彼女がアメリカのハミルトン大学の学生のとときだった。ある講義で「広島への原爆投下を正当化する人でも、三日後の長崎原爆投下をどのように正当化できるのか」という一人の学生の問いかけが心に残ったと言う (中地 26)。おそらく原爆投下50周年を前にした授業の一コマだと思われるこの記憶は、シャムシーの五作目『焦げついた影』 (*Burnt Shadows*, 2009) 創作のきっかけとなっていく。ストーリーは二度目の原爆が投下された長崎市を舞台にして始まる。浦上近くの自宅で被爆した主人公ヒロコは、戦後インドへ渡り、その地で知り合ったイスラム系インド人と結婚する。その後ヒロコは、デリーで印パ分離戦争 (1947)、カラチでソ連のアフガニスタン侵攻 (1979～89)、さらにニューヨークでアメリカ同時多発テロ (2001) と、移り住む先々で紛争や大惨事に遭遇するのだった。

物語の最終章では同時多発テロから三か月後のアメリカ (ニューヨーク) とアフガニスタンが交互に舞台となっている。アフガニスタンで働く一人息子ラザからヒロコの元へ、アメリカに不法滞在している旧友アブドゥラーの国外脱出の手助けをしてほしいと連絡が入り、彼女はそれを承諾する。カナダまでの運転はヒロコの親友の孫娘キムが引き受けることになった。パキスタンのパスポートを持つヒロコより、ビザなし特権があるアメリカ人のキムの方がカナダへの国境超えが容易いという理由からである。しかし「怪しいアフガン」としてFBIに追われているアブドゥラーに対するヒロコとキムの考え方は、相反していた。ヒロコは故郷が戦争によって荒廃し喪失感を覚えていたアブドゥラーに共感し、逃亡援助を即座に引き受けた。他方、アフガニスタンで働く父をタリバーンに殺されたばかりのキムは、国境超えに協力はするものの、聖戦で死ねば殉教者になれるというアブドゥラーの話に激怒する。そして「よそ者」であ

る他者への嫌悪感から、キムはカナダ警察へアブドゥラーの逃亡を通報してしまう。時同じくしてラザも無実の罪でCIAに追われてカナダに逃げ込んでいた。彼はアブドゥラーと再会した直後、自ら旧友の身代わりとなって拘束されたのである。

キムの突然の裏切りを知ったヒロコは、長年抱いてきた疑問—「なぜ二度目の原爆を落としたのか」(100)—に対する答えをようやく見つけたとキムに語る。

You just have to put them in a little corner of the **big picture**. In the **big picture** of the Second World War, what was seventy-five thousand more Japanese dead? **Acceptable**, that's what it was. In the **big picture** of threats to America, what is one Afghan? **Expendable**. Maybe he's guilty, maybe not. Why risk it? Kim, you are the kindest, most generous woman I know. But right now, because of you, I understand for the first time how nations can applaud when their governments drop a second nuclear bomb. (370. 太字は筆者)

(訳) あなたは大局の隅っこに彼らを置くしかなかった。第二次世界大戦の大局において、7万5千人さらに多くの日本人が死んだからってどうだっていうのか？ 容認できる。そういうことね。アメリカへの脅威という大局において、一人のアフガニスタン人がどうだっていうの？ 犠牲にしてもよい。ひょっとすると彼は罪を犯しているかもしれないし、そうでないかもしれない。それなら、どうしてリスクを冒すの？

キム、あなたは一番親切で寛大な女性だわ。でも今初めて、あなたのおかげでわかった。二番目の原爆を落としたときにこの国の国民が喜んで支持した理由を。

「ビッグ・ピクチャー＝大局」とは国の利益を守るというナショナリズムに則ったシナリオであり、そのシナリオにおいては異民族の人間性を否定することもやむをえないと考える。広島への最初の原爆投下が十分過ぎる被害を与えたことは、アメリカ政府も当然周知していた。しかし自国を異民族の脅威から守るために二度目の原爆を投下し、犠牲者がさらに7万5千人増えたところで、それも「容認できる」ことなのだ。対テロ政策においても同じく、イスラム教徒によるテロの脅威から国を守るためなら、無実のアフガンを一人「犠牲にしてもよい」のだ。長崎へ二度目の原爆を投下したとき米国民は拍手喝采して喜んだ。同様に、身代わりとなって逮捕されたラザがCIAに追われている容疑者だと分かったとき、カナダ警察はアメリカのナショナリズムに準じた行動をとったキムに「お父さまもあなたを誇りに思うでしょう」(370)と称賛の言葉を送ったのである。

朝日新聞の編集委員吉田純子は、「法務大臣は死刑のはんこを押した時だけニュースになる地味な役職だ」という当時の法務大臣の発言⁶を念頭に、「死をひとまとめにする言葉のあまりの軽さ」に言葉を失ったと語る。そして「人々の死がひとくりにされ、美しい物語が生まれ

るとき、そこに必ず何らかの意図が介在することを忘れてはならない」と語り、「ひとつひとつの死」に目を向ける芸術家の「豊かな個を取り戻す」言葉に、音に、身振りに注目するよう呼び掛けている（吉田、2022）。シャムシーの『焦げついた影』はまさしく、国のビッグ・ピクチャーに埋没されてしまう「個人の生」に焦点を当てた作品だといえよう。

＜アメリカから逆輸入された長崎被爆者の証言文学＞

次に取り上げるのは二人のアメリカ人女性による長崎被爆証言文学である⁷。原爆に対してアメリカ人の関心が高まったのは、スミソニアン航空宇宙博物館による戦後50周年記念企画と関係がある。当初の企画の趣旨は、見学者に原爆投下に伴った諸問題を再考してもらうというものだった。この企画のため、広島に原爆を投下した戦闘機エノラ・ゲイや実際の原爆被害の資料の展示も予定されていた。しかし、この企画は原爆投下が多くの人を救ったという米国の公式見解と対立するものであり、アメリカ退役軍人や一般市民からも強い抗議があったため、結局、被爆資料の展示は中止となった。当初の案は流れたものの、企画展を巡る賛否論争は原爆投下の是非そのものを改めて問い直す原爆論争へと繋がっていったのである。

高校時代に日本に留学したスーザン・サザード（Susan Southard）は修学旅行で長崎原爆資料センター（原爆資料館の前身）を訪問し、そこで見学したものは以後忘れられない記憶となった。この経験から彼女は1986年、ワシントンD.C.で長崎の被爆体験を語る谷口稜^{すみてる}の通訳を務めることになった。しかしサザードが原爆被害者についてもっと深く知りたいと思うようになったのは、さらに先になってからであり、おそらくはアメリカ同時多発テロ事件（2001年9月11日）の影響があったのだろう。アメリカ社会を突然襲ったあの惨事がサザードに長崎原爆の惨事を想起させたと推測するのは、突飛なことではないはずだ。その後彼女は11年間にわたって幾度も長崎を訪れ、谷口を含む5人の被爆者とインタビューを重ね、集められた被害者の証言が『ナガサキ核戦争後の人生』（*Nagasaki: Life After Nuclear War*）として2016年に世に出た。インタビューした被爆者たちがその体験を語り始めたきっかけや時期はさまざまである。被爆時に16歳だった谷口は一番早く、1970年代後半から語り部となった。和田絃一（被爆時18歳）は1983年から、吉田勝二（被爆時13歳）と堂尾みね子（被爆時15歳）は1992年から、永野悦子（被爆時16歳）は1995年から、それぞれの原爆体験を語り始めた。自分が原爆を投下した国の人間であることを意識しているサザードは、被爆者の語りを間違った方向へ操作することを極力避けるため、彼らの言葉や表現を用いるように注意をはらったと言う（Southard xx）。確かにこうした個人的体験談は、数値化された資料や写真も凌ぐほど、原爆のもたらしが被害の凄まじさを読者に伝えている。

もう一人の証言文学作者のカレン・ステルソン（Caren Stelson）には、ドイツ軍との戦争に従軍した父がいた。しかし生前、父が自身の戦争体験を語ることはなかったと彼女は語っている。2005年、ミネアポリスで行われた原爆60周年記念行事に参加したステルソンは、そこ

で長崎の安井幸子の被爆体験を聞き、初めて自分が戦争被害というものについて何も知らなかったことを痛感したのである。それから5年後、彼女は安井に連絡をとりインタビューを申し込んだ。6歳で被爆した安井が体験を自らの言葉で語り始めたのは、原爆50周年の1995年、56歳のときだった。ステルソンも安井との対面インタビューを何度も重ねた後、2016年に『サチコ』(Sachiko: a Nagasaki Bomb Survivor's Story) という一冊の本にまとめたのである。

原爆投下後、アメリカの厳しい報道規制と検閲により、日本のみならずアメリカでも原爆がもたらした破壊力や被爆の実態は約6年間国民から隠されてきた。原爆投下を正当化してきたアメリカ側の人間であれば、何年か後にそうした実態がたとえ明らかになっても新たな知識の一つとして聞き流したかもしれない。一方、サザードとステルソンが被爆者にインタビューをしようと決心した動機は、被爆者の声を聴いたことがきっかけであり、一般的な情報・知識からは何も学んでいなかったことに気がついたからだろう。ではそれがなぜ「長崎」原爆だったのだろうか。それはもちろん、「長崎」の被爆者の話を聴いたからであるし、サザードの場合にはかつて長崎原爆資料館へ訪問したこともあり、「知った土地」であったからだ。しかしさらに想像を膨らませるならば、「出島」や「キリシタン迫害」や「蝶々夫人」など海外との関係から生まれた固有の文化を持つ長崎は、被爆地としての存在を「原爆投下の世界的シンボルとなった広島」(Southard xviii) の陰にすっぽりと隠されてしまっている。そのことに気づき、関心を持ったのではないかと考えられるのである。彼女たちは知られざる被爆地「長崎」の〈土地の力〉に惹きつけられたといえるのかもしれない。二人の著書のタイトルに「長崎」が入っていることから、その「土地の力」の働きを無視することはできないだろう。長崎は広島とは異なる原子爆弾が用いられ、二度目の原爆投下という点でも広島とは異なる軍事的、倫理的観点からの分析が必要なのは当然である。サザードとステルソンはナショナリズムを超えて、さらには被爆者をひとくくりにすることなく、長崎の被爆者の「豊かな個を取り戻す」(吉田、2022) そうとしたのである。

III 加害者としての長崎の記憶

戦争には常に加害者と被害者の両サイドがある。言い換えれば侵略者も被害者になりうるし、被侵略者も加害者になりうるということである。長崎は歴史的に被害者の土地として国内外に知られている。その長崎が加害者の側面を想起させる土地にもなるのである。

〈加害行為への気づき—『相互理解の辞書』〉

スコットランド人作家ジャッキー・コプルトン (Jackie Copleton, 1972～) は1990年代前半に長崎で英語教師をしており、1995年には当地で行われた原爆投下50周年記念行事に参加した経歴を持つ。彼女の母方の祖父は第二次世界大戦で戦死、また父方の祖父はミャンマー(ビルマ)で日本軍と戦ったそうだと(Copleton, "A Conversation with Jackie Copleton")。コプルトンの『相互理解の辞書』(A Dictionary of Mutual Understanding, 2015) は、両祖父の「敵国」

の長崎をメイン舞台にした小説である。この小説には、丸山、新地中華街、唐人屋敷跡、稲佐国際墓地、浦上地区、オランダ坂など、登場人物が散策する長崎各所の地名が列挙され、長崎ガイドブックの様相を呈している。そしてそれら各所の土地の重層する記憶が物語の出来事や登場人物の心情と共鳴し合っていく⁸。

物語の内容を簡単にまとめておこう。日本人の語り手高橋アマテラスは原爆によって一人娘ユーコと7歳の孫ヒデオを亡くし、その喪失感から戦後まもなく夫とともにアメリカへ移住した。夫の死後、一人暮らしをする81歳の彼女の元へ、孫の「ヒデオ」と名乗る40代の男性が訪ねてきた。ひどい火傷で顔が変形したその男は、彼女が長年憎んできたジョーメイ医師の養子として育てられたことを告げた。彼の訪問はアマテラスが長年封印してきた過去を振り返るきっかけとなる。母娘二代にわたって一人の男性と恋愛関係を持ち、その結果、嫉妬心が混じる屈折した母の愛情が娘の死の遠因となったことに彼女は直視していく。

長崎原爆によるユーコの死が『相互理解の辞書』のきっかけとなったのは明らかであるが、本稿で注目したいのは、戦争に伴う加害行為の側面である。広島に続いて二番目の原爆が、当初の目標地である小倉から変更されて長崎に投下されたことは良く知られている。とはいえ、長崎も軍需関連工場都市としてアメリカ軍の投下候補であったことは確かである。ところが長崎市上空の雲が邪魔をしたため、投下目標地がまたもや変更し、結局、雲間に見えた山間の浦上地区に原爆が投下された。浦上は1920年までは長崎郊外の郷村であり、旧市街とは地理的のみならず、歴史的、宗教的にも一線を画していた(富永 139-40)。隠れキリシタンの集落があった浦上に対し、旧市街の住民は「差別的なまなざしを向け」ていたためである(富永 139)。その浦上への原爆投下、さらに金毘羅山が防壁となって旧市街への被害が少なかったことが、長崎の分断を一層強調することになった。この分断のため長崎を一律に被爆地として表象するのは難しい。つまり長崎は被爆者の街ではあるが、被爆者に対する差別という点では加害者にもなっていたからである。

さらに日本は原爆の被災国ではあるが、その原因となる戦争に関して加害国だったという歴史的背景も忘れてはならない。日本は太平洋戦争に先立ち中国に侵略した。物語の中でジョーメイ医師は、ハルビンのピンフォングで石井四郎率いる731部隊の一員として、中国人を対象に人体実験を行っていたことを告白している⁹。また鉦山技師だったユーコの夫のシゲは、出兵前、端島(軍艦島)で石炭採掘に関わっていた。当時の石炭採掘は軍事産業の一部であり、戦時中の労働者不足のため、端島炭鉦でも朝鮮半島から徴用された女・子どもに強制労働をさせていた。医学実験の面においてもエネルギー産業の面においても、日本は戦争という加害行為に加担していたのであり、長崎が原爆の投下候補地として選ばれるそれなりの理由があったということである。文化社会学者の木村至聖^{しせい}は長崎を被爆の記憶としてのみ語ることにに対し、次のように疑義を申し立てている。

長崎にとって被爆の記憶と産業の記憶とはまさに相似的な関係にある〔中略〕被爆は

もちろん戦争の体験を直接持つ世代が少なくなり、いかに非体験者が体験者の記憶を自らのものとして受けとめ、受け継いでいくかが社会的な課題となっている。そうしたなかで、被爆の体験の生々しさだけを伝えていくだけでなく、なぜ日本が「唯一の被爆国」になり、長崎がその一つの攻撃対象として選ばれたのかということ、言葉で伝えるために論理的に理解しておく必要がある。被爆という結果／被害の記憶だけでなく、軍艦島について記憶することは、長崎の産業都市化／日本の帝国化という原爆投下の一つの原因／加害について語ることにつながる。（木村 63-64）

被災地域や国がその被害を集合的記憶として留めることは容易だが、加害行為を集合的記憶とすることは難しい¹⁰。共同体を維持するために「歴史の特権」は「特定の共同体の記憶を修正し、批判し、さらに否認さえする」からだ（リクール下 311）。結果として、権威ある共同体が公的歴史を操作することによって、忘却は「集合的記憶の規模として機能」するのである（リクール下 243）。集団的な加害行為についてはせいぜい個人レベルでの罪の自認しかないかもしれない。人体実験に加担したというジョーメイの告白も死者に宛てた手紙というプライベートな形で行われ、公の場で語られることはないのである。しかし、こうした国家の負の記憶が文学作品の中で表現されるとすれば、舞台となった長崎の土地が果たす役割は大きい。

〈捕虜たちによる長崎原爆の語り〉

イギリスのドキュメンタリー制作の演出担当者だったジョン・ウィリス（John Willis）は、1984年、同僚クリス・ブライヤー（Chris Bryer）の父ロン・ブライヤー（Ron Bryer）が旧日本軍の戦争捕虜として長崎に抑留中、原爆を目撃したという話を聞いた。同年夏、ロンを含む元捕虜らが長崎に招かれたとき、ウィリスも同行することになった。それから数十年を経た後、彼はイギリスでは未だに知られていない長崎の捕虜たちの抑留および原爆体験記録をまとめることに着手した。旧日本軍捕虜（イギリス人、オランダ人、オーストラリア人、アメリカ人）に対する虐待問題に関しては、泰緬鉄道建設を描いた映画や小説の中ですでに何度も取り上げられてきているが¹¹、その他の場面での彼らの体験がまともに取り上げられることはなかった（Willis x）。2022年に出版された『長崎—忘れ去られた捕虜たち』（*Nagasaki: The Forgotten Prisoners*）の前書きで、ウィリスは「日本軍捕虜となった人たちのすべての国で一様に使われる言葉は『忘れ去られた』である」（Willis x）と述べているように、長崎抑留中のとくに英国人捕虜の体験はそれまで形を成して世に出てこなかったのである。旧日本軍捕虜たちが秘密裡に書き残した日記やインタビューという記録と記憶を紡いだウィリスの書は、長崎原爆の体験を従来とは全く異なる視点から描いたという意味で、補完的な戦争記録といえるだろう。

長崎に抑留された捕虜は原爆に遭遇する前に、すでにマレーシア、シンガポール、ジャワ島の捕虜収容施設において、そして悪名高いミャンマーの泰緬鉄道建設現場において、文字通り生死の境をさまよう環境を生き抜いてきた。その後も「地獄船」（hellship）と呼ばれた移送船

にすし詰め状態に詰め込まれ、移送中、味方である連合軍潜水艦に撃沈され、奇跡的に生き延びて長崎に辿り着いた捕虜もいた。本書の前半には長崎に移送される前の捕虜たちのこうした体験が語られている。複数の収容所で3年半にわたる捕虜生活を生き抜いた最終場面で、彼らは原爆というさらなる惨事に出会った。実際の体験者である捕虜たちはこの原爆をどのようにとらえたのだろうか。

長崎には福岡俘虜収容所第十四分所と第二分所の二つの捕虜収容所があった。前者は三菱重工業長崎造船所幸町工場内にあり、ピーク時には545人が収容されていた。後者は長崎南部の香焼町にある日本で二番目に大きな収容所で、最多で1500人近い捕虜が抑留されていたという。戦後明らかになったのは、赤十字社から支給される医薬品や食糧がきちんと捕虜に配給されなかったということだ¹²。そのため工場内での事故や拷問まがいの暴力に加え、食糧・医薬品不足から脚気や肺炎、飢えによる死が相次いだ。第十四分所に収容された捕虜の死者総数は105人、毎週1人が亡くなるペースだった(Willis 198-99)。収容中の死者の割合としてこの数は、終戦当時130ほど存在した捕虜収容所の中では一番高かった¹³。こうした死の瀬戸際を生きていた捕虜たちの元に、8月9日、あの原爆が落とされた。ちなみにアメリカの情報部は、当時2000人近い連合軍捕虜が長崎で労役に就いていたことを把握していたという(Willis 238)。『焦げ付いた影』で考察してきたように、大局のためにはたとえ味方であっても「犠牲にしてよい」一例だったのである。

原爆の被害の大きさは爆心地にどの程度近いかに拠る。爆心地から3kmの圏内の長崎市内の建物の約85%が被害にあったことを踏まえると、8km離れた第二分所と比べて、1.8kmしか離れていなかった第十四分所の被害がいかに大きかったのかは容易に推測できるだろう。ところが幸運にもいくつか偶然が重なり、被害は極めて少なかった。原爆投下時点で第十四分所には200人の捕虜が収容されていたが、この日は大半の捕虜が3.5km離れた造船所にいた。残った者は8月1日の空襲で破損した防空壕や近隣の橋の補修作業に従事していたが、投下時刻前に外の作業は終わり、ほとんどが建物の中にいた。結果として、原爆による被害は死者7名、負傷者30名と、爆心からの距離にしては驚くほど少なかったのである¹⁴。

では、生き残った旧日本軍捕虜たちはこの原爆をどのように受けとめたのだろうか。日本人被災者と同様の体験をしていたにもかかわらず、意外にも多くの捕虜は原爆が戦争を終結に導き日本兵の蛮行から自分たちを解放してくれたという喜びを一様に語ったのである¹⁵。原爆が引き起こした惨状を目の当たりにし混乱の中で夥しい数の死者を火葬する手伝いをしながらも、原爆投下を肯定した理由は、長い過酷な抑留生活が彼らにとって死と紙一重であったためである。それに加えて、幸運にも仲間の被害者数が極めて少なかったことも原爆を否定しない要因だったのである。彼らの原爆投下の受けとめ方を倫理面から安易に批判する前に留意すべきことがある。それは、捕虜たちのそうした思いが3年余り続いた抑留体験と密接に結びついているということである。彼らにとって長崎は旧日本軍の一連の加害行為の最終地点であり、原爆はそれらの行為の結果だったのである。

すでに触れたように、加害行為というのは加害当事者ですらそれを認識することは難しいし、ましてや時代を超えた人々にとっては自分たちとは無関係の「他人事」であろう。ここで批判的想像力の重要性を説くテッサ・モーリス＝スズキの言葉に耳を傾けたい。

わたしの言う「連累 (implication)」とは、過去との直接的・間接的関連の存在と、(法律用語で言うところの)「事後共犯」の現実を認知する、という意味である [中略] 現在生きているわたしたちは、過去の憎悪や暴力を作らなかったかもしれないが、過去の憎悪や暴力は、何らかの程度、わたしたちが生きているこの物質世界と思想を作ったのであり、それがもたらしたものを「解体 (unmake)」するためにわたしたちが積極的な一歩を踏み出さない限り、過去の憎悪や暴力はなおこの世界を作り続けていくだろう [中略]「連累」は、心理学的状態であると同時に、継続する不正義の構造に抗した社会的政治的参加でもある。(モーリス＝スズキ 66-67)

私たちは常日頃、他者の立場から語られる過去の物語に耳を傾けることで、私たちが前提としているものを、すすんで疑問や挑戦にさらさねばならない。こうした方法によって過去を学ぶことが、現在における有意味な位置の創出と、未来に向けた意義あるヴィジョンを構想するための、私たちの不断の努力の一端となりうるはずだというのが、私の考えであると共に希望でもある。(モーリス＝スズキ 104)

他者の立場から語られる長崎の物語は従来の記憶を検証し直すことになる。ウィリスの『長崎—忘れ去られた捕虜たち』は長崎原爆の原因 / 加害と結果 / 被害の両面を私たち読者に振り返らせる。モーリス＝スズキの「連累」とともに、吉田純子の「本や劇場は「当事者」となる疑似体験の装置であり、他者への想像力を培う触媒になりうる」(吉田、2023) という「当事者」観は、異なった長崎の記憶に向き合う心構えを教えてくれる。

IV 不連続を繋ぐ長崎

原爆は人間を一瞬にして家系からも土地からも完全に断続してしまう。青来有一の『爆心』(2006)に収められた短編「鳥」は、血縁・地縁から切断された疎外感を生涯持ちながら生きていく原爆被害者を描いた作品である。『爆心』は2014年にポール・ウォラム (Paul Warham) によって英訳されていることから、英語圏文学ではないものの本稿で取り上げることにした。

「鳥」の語り手は生まれて間もない頃、被爆直後の原子野^{げんしや}で、後に養母となる女性に拾われた。養父母を看取り、還暦を迎えて定年を目前にした彼は、初めて自分の被爆体験に向き合う決心をし、現在それを文章に綴っている最中である。とはいえ、彼の体験は戸籍の父母欄の空白が象徴するように、自分が誰なのかどこから来たのかもわからない空虚感しかない。幼少の頃、養母がよく語ってくれた白鷺の逸話があった。それは風頭¹⁶の家の近くの池に舞い降りてきた

白鷺が乳飲み子だった彼が泣いているのを見ると、その途端、彼はびたりと泣き止んだという話である。養母は白鷺を浦上の原子野から飛んできた彼の実母の化身だと信じ、その話を彼に聞かせ続けたのだ。被爆体験を書いている晩のことだった。階上から聞こえた物音に気づいて妻と調べたものの、何の音か確認できなかった。翌朝、テグス糸に絡まった瀕死の白鷺が屋根にいるのを見つけ、昨夜の物音の正体が分かった。体に巻き付いたテグス糸を丁寧に解いたが、結局白鷺は死んでしまう。鳥を庭に埋葬しながら、語り手は原爆で苦しみながら死んでいったであろう親に思いを馳せていた。

白鷺の埋葬が、浦上で亡くなった母の代理の埋葬という「喪」の儀式であることは明らかだ。つまりこの埋葬は空白だった血縁の回復が暗示されているのである。同時に、この行為によって語り手は養家の風頭に地縁ができ、土地と「身体の接続」（鈴木 34）ができたことも意味しているだろう。風頭の「家」に対する彼の疎外感は、誰の子どもかもわからない、どこからやって来たのかわからないという根無し草のような疎外感だった。しかし、養母のナイーブな逸話をそのまま信じるならば、この喪の儀式は浦上の魂となった彼の母を風頭に弔う行為となり、土地との＜繋ぎ＞行為となったのである。

「鳥」という作品に見て取れる「繋ぎの記憶」の層は、実は文学作品の新たな地平を開いていくことも示唆している。土地の記憶の層は必ずしも連続しているわけではない。とくに原爆という惨事は地縁、血縁を切断してしまう、いわば記憶の空白の層を作り出してしまうのである。青来の別の短編小説「ジェロニモの十字架」における墓地から発掘された古いキリシタンの十字架は、土地に埋もれた記憶のマテリアルな形である。他方の「鳥」では逆に、土地に白鷺を埋めることによって、「繋ぎの記憶」の層を作り出していく。ここで思い出されるのはカナダの詩人ロバート・クロウチ（Robert Kroetsch）の創作論である。クロウチはカナダ西部という「新しい国」で創作することを考古学の方法と結びつけて次のように語る。

「我々はまだすべての物語をつかんでいない [中略] 考古学は伝統的な歴史の強制的統一に対抗して物語の断片性を認める。考古学は不連続を認める。層を認める。想像力の憶測を認める」。 (Kroetsch 7. 筆者訳)

長崎は記憶の層を持つ土地であるが、同時に断絶を体験した土地でもある。その土地を舞台に新たな文学作品が創造されている。ナショナリズムを超えてひとり一人の個の生に目を向けさせる長崎、他者の立場から戦争の原因 / 加害を考えさせる長崎、記憶の断絶の層に想像力を呼び起こす長崎。土地の記憶の力は文学創造者も読者も共に、21世紀社会の当事者として生きる意味を考えさせてくれる。

*本稿は、2023年12月2日日本比較文学会中部第55回大会シンポジウム（愛知学院大学名城キャンパス）において、「他者の立場から語られる原爆の物語—長崎の＜土地の力＞から「個人の生」を考える」を加筆修正したものである。

注

1. 2016年に『イギリス・ヘリテッジ文化を歩く—歴史・伝承・世界遺産の旅』（共）として著した。
2. 拙論「戦争の記憶と忘却」（2017）と「*The Buried Giant*における記憶と忘却の物語」（2018）を参照のこと。
3. 葉柳和則編著『長崎—記憶の風景とその表象』は、長崎の重層化する記憶に関して各方面からのアプローチがなされた優れた論文集である。
4. 長崎を舞台にした作品例：Pierre Loti, *Madame Chrysanthème*, 1887; John Luther Long, *Madame Butterfly*, 1897; David Belasco, *Madame Butterfly: A Tragedy of Japan*, 1900; Joy Kogawa, *Obasan*, 1981, *Gently to Nagasaki*, 2016; Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills*, “A Strange and Sometimes Sadness”, 1982; Kamila Shamsie, *Burnt Shadows*, 2004; Eric Faye, *Nagasaki*, 2010; David Mitchell, *The Thousand Autumns of Jacob de Zoet*, 2010; Jackie Copleton, *A Dictionary of Mutual Understanding*, 2015; Susan Southard, *Nagasaki: Life after Nuclear War*, 2015; Caren Stelson, *Sachiko: A Nagasaki Bomb Survivor’s Story*, 2016; John Willis, *Nagasaki: The Forgotten Prisoners*, 2022.
5. 拙論「『焦げついた影』における過剰なナショナリズムとトランスナショナルな絆」と一部重複している。
6. 2022年11月9日、岸田派の葉梨康弘法務大臣による議員パーティでの発言。
7. 長崎被爆者の証言文学については拙論「重層化する記憶—ジョイ・コガワ作品における長崎の表象」の4～5頁と重複している。
8. 拙論「記憶が重層化する長崎—*A Dictionary of Mutual Understanding*における愛憎物語」と一部重複している。
9. ジョーメイの手紙の中で、炭疽菌やチフス菌などの病原菌の研究や細菌爆弾製造工場について、また人体実験の対象者をマルタ（丸太）と呼ばれることについての言及がある。
10. 戦争に伴う記憶と忘却に関しては、拙論「戦争の記憶と忘却」を参照のこと。
11. 『戦場に掛ける橋』（*The Bridge on The River Kwai*, 1957）はイギリスとアメリカの合作映画であり、第30回アカデミー賞作品賞を受賞した。ノンフィクションとしてイギリス人Clifford Kinvigの*River Kwai Railway: The Story of the Burma-Siam Railroad*（1992）、フィクションにはオーストラリア人Richard Flanaganによる2014年マン・ブッカー賞受賞作品*The Narrow Road to the Deep North*（2013）などがある。
12. 同収容所のオランダ人捕虜レネ・シェーファーによると「食事のことでとくに困ったことはなかった。実際に空腹に悩まされたことはなかった」。捕虜同士の間でもとらえ方が違っていたようである（シェーファー『オランダ兵士長崎被爆記』。笹本妙子によるレポート）。
13. 福林徹の「日本国内の捕虜収容所」（POW研究会）を参考にした。
<http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplst/index.html#fukuoka>. 2023年10月6日

閲覧。

14. ウィリスは8名の死者としているが、その中の1名は8月1日の空襲時に亡くなった。
15. 2022年に筆者が長崎原爆資料館を訪問したとき、元オーストラリア人捕虜5人の被爆証言のビデオが上映されており、そのうち4人が原爆投下は正しかったと語っていたのが印象に残っていた。一方で、同じく被爆者であるレネ・シェーファーは原爆が戦争終結を早めたという意見に異議を唱え続けている（笹本）。
16. 爆心から3キロ圏外に位置する。

使用文献

- Assmann, Jan. "Collective Memory and Cultural Identity," translated by John Czaplicka. *New German Critique*, 65, 1995, pp. 125-133.
- Copleton, Jackie. *A Dictionary of Mutual Understanding*. Windmill Books, 2015.
- "A Conversation with Jackie Copleton." *Compulsive Reader*, November 13, 2015.
- Kroetsch, Robert. *The Lovely Treachery of Words: Essays Selected and New*. Oxford UP, 1989.
- 『言葉のうるわしい裏切り 評論集・カナダ文学を語る』久野幸子訳、彩流社、2013.
- Shamsie, Kamila. *Burnt Shadows*. 2004. Picador, 2009.
- Southard, Susan. *Nagasaki: Life after Nuclear War*. Penguin, 2016. 『ナガサキー核戦争後の人生』宇治川康江訳、みすず書房、2019.
- Stelson, Caren. *Sachiko: A Nagasaki Bomb Survivor's Story*. Carolrhoda, 2016.
- Willis, John. *Nagasaki: The Forgotten Prisoners*. Mensch Publishing, 2022.
- アルヴァックス、モーリス『集合的記憶』小関藤一郎訳、行路社、1989.
- 大江健三郎『言い難き嘆きもて』講談社、2001.
- 木村至聖「「長崎」の記憶として軍艦島を語ることは可能か」『長崎—記憶の風景とその表象』葉柳和則編、晃洋書房、2017、pp. 45-67.
- 笹本妙子「長崎三菱造船分所—笹本妙子によるレポート」POW研究会
http://www.powresearch.jp/jp/pdf_j/research/fk14_saiwai_j_2.pdf. 2023年10月6日閲覧。
- 陣野俊史「「その後」の戦争小説論 ⑦—青来有一『爆心』とポスト原爆小説」『すばる』8月号、2009、pp.274-287.
- 鈴木智之「土地の記憶と物語の力—「郊外」の「文学社会学のために」1」『社会志林』61-3、2014、pp. 23-53.
- 青来有一『爆心』文春文庫、2006、2010. *Ground Zero, Nagasaki: Stories*. Translated by Paul Warham, Columbia UP, 2014.
- 「ジェロニモの十字架」『聖水』文春文庫、2004.
- 富永佐登美「観光都市における被爆の表象—地図に描かれる長崎を例として」『長崎—記憶の

- 風景とその表象』葉柳和則編、晃洋書房、2017、pp. 133-159.
- 中地幸「パキスタン系作家 Kamila Shamsie の *Burnt Shadows* における移動する主体と傷の共有」『AAAA』第17号、2011、pp. 22-31.
- 野家啓一『物語の哲学—柳田國男と歴史の発見』岩波現代文庫、2005.
- 林正子「文学における「場所の力」—「故郷」の「風土」を視座とする地域文化論構築に向けて」『岐阜大学地域科学部研究報告』第22巻、2008、pp. 17-36.
- 葉柳和則編『長崎—記憶の風景とその表象』晃洋書房、2017.
- 平林美都子『イギリス・ヘリテージ文化を歩く—歴史・伝承・世界遺産の旅』（共著）彩流社、2016.
- 「戦争の記憶と忘却」『愛知淑徳大学論集グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第9号、2017、pp. 1-11.
- 「*The Buried Giant* における記憶と忘却の物語」『愛知淑徳大学論集文学部編』第43号、2018、pp. 41-51.
- 「記憶が重層化する長崎—*A Dictionary of Mutual Understanding* における愛憎物語」『愛知淑徳大学論集文学部編』第47号、2020、pp.1-12.
- 「『焦げついた影』における過剰なナショナリズムとトランスナショナルな絆」『愛知淑徳大学論集グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第13号、2021、pp. 1-10.
- 「重層化する記憶—ジョイ・コガワ作品における長崎の表象」『愛知淑徳大学論集グローバルカルチャー・コミュニケーション研究科篇』第14号、2022、pp. 1-14.
- 福林徹「日本国内の捕虜収容所」POW 研究会
<http://www.powresearch.jp/jp/archive/camplist/index.html#fukuoka>. 2023年10月6日閲覧。
- モーリス＝スズキ、テッサ『批判的想像力のために—グローバル化時代の日本』平凡社、(2001) 2013.
- 吉田純子「日曜に想う—豊かな「個」取り戻す芸術」『朝日新聞』2022年11月27日.
- 「日曜に想う—「私も当事者」劇場での気づき」『朝日新聞』2023年2月12日.
- リクール、ポール『記憶・歴史・忘却、(下)』久米博訳、新曜社、2005.

